

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 10 月 5 日現在

機関番号：32668

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25590272

研究課題名(和文)震災復興と中山間地振興に資する教材開発及び教師教育プログラムの構築

研究課題名(英文) Development of materials/programs for teacher education to contribute to relief of the East Japan and reconstruction of its mountainous area

研究代表者

田村 真広 (TAMURA, Masahiro)

日本社会事業大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：90271725

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：このプロジェクトでは、教師教育に携わる8大学のメンバー達が、学校の授業で有効活用できるパネルシアター教材6作品を共同で開発した。それぞれが所属する大学での実践研究を通じて、開発した教材の有効活用・普及・定着の方途を探った。震災復興に取り組む宮城県の学校や、人口減少に悩む中山間地域の学校における研修を通じて、地域振興に資する教育実践研究と教員養成・研修の構築を試みた。

このプロジェクトにおいて、大学と学校と地域の連携によるパネルシアター教材の開発方法と、教師教育実践研究の拠点を確立できた。今後の研究課題は、パネルシアター教材の有効性の比較検証により授業改善の条件や効果を明らかにすることである。

研究成果の概要(英文)：The members of 8 universities who participate in teacher education have developed 6 works of panel theater teaching materials which can be effectively used at the class in school jointly by this project. We looked for the way of the effective use, the spread and the settlement of the teaching materials developed by action-training-research at the university to which each belongs. We tried, teacher training and action-training-research in schools in Miyagi Prefecture in the reconstruction work and suffer from depopulation in rural schools, contributing to the regional development and construction.

We could establish a base of a development method of panel theater teaching materials by cooperation in a university, school and an area and teacher educational action-training-research in this project. A future research task is to make the condition and the effect of the class improvement clear by comparative inspection of the validity of the panel theater teaching materials.

研究分野：教育学

キーワード：教材開発 教育課程 パネルシアター 教師教育 被災地復興 中山間地振興 実践指導力

1. 研究開始当初の背景

約3ヶ月ごとに推進会議を開催し、各大学での実践研究を進めつつ、中山間地や被災地の学校において教材開発を伴う教育課程の検討会議を開催し、学習用パネルシアターの試行授業と作品づくりを展開してきた。推進会議や検討会議での審議内容、試行授業の振り返りは、学習用パネルシアター4作品の仕上げに生かされた。試行授業の模様をDVDに収めることにより、初心者でも実演への抵抗感が和らぎ、より探究的な授業展開となるよう、実施マニュアルの編集に工夫を凝らした。

2. 研究の目的

本プロジェクトの最大の目的は、大学間・地域間・校種間の連携によるパネルシアター教材の開発と教師教育実践研究の拠点を確立することにある。

3. 研究の方法

本プロジェクトでは、1.各大学や学校において実施されたパネルシアターの製作・実演・授業への省察を比較検証し、実践的指導力を高める教員養成課程に改善する。2.小学校以上でのパネルシアター活用の有効性を学術的に立証する。3.デンマーク、タイ、インドネシアではすでに着手したが、国内やアジア等国外においてパネルシアターの適用可能な場を広げ、持続的な実践研究&製作サイクルを確立していく。

4. 研究成果

疲弊しつつも震災復興に精力を注いでいる宮城県の教員達とは、「わり算」「かけ算」のパネルシアターづくりを通じた教育課程研究のネットワークを築くことができた。北海道、石川、愛知、愛媛、高知、長野においても、人口減少の深刻化している中山間地の教員達と研修を行った。長野県立科小学校の2年生学級では、算数にパネルシアターを導入したところ、三ヶタのくり下がりイメージをつかみ、つまづいていた子どもまでも容易に理解できるようになった。東京、埼玉、千葉においては、学校のみならず児童館でも実施された。文京区の児童館では、学生ボランティアがパネルシアターを持ち込み、ストーリー展開を教えず子どもに絵人形だけ与えてストーリーや演じ方を考えさせるという形で進めたところ、同じ絵人形を使ってもストーリー展開や演じ方が異なるといった個性的なパネルシアターを楽しむことができた。

以下、研究分担者による実践研究報告(一部)を掲載する。

(1)名古屋芸術大学 加藤聡一

後期「教育方法論」(幼児・小免必修科目、2年生配当)の2クラスでパネルシアターを扱った。1回と半分のコマですすめた。

5グループに分け、「かずってなあに」「あかちゃんがうまれた」のほか、「カレーライス」「はらぺこあおむし」を用意し、1グループ1つのパネルシアターを担当した。「かずってなあに」は2つ用意した。

1時間目の後半から取り組み、各グループでパネルシアターを箱から出すところからはじめ、切り取り作業に入った。2時間目で、その続きをして完成させてから、グループごとに実演していき、私の方でまとめて感想文を書いて終了した。

本学では、幼稚園実習1週間あとの事後指導で学生は各自お手製・自作の小さなパネルシアターをつくり(ボードも自作)その後保育所実習にそれを持っていくことが定着しつつある。学生は、市販の、複雑で大きなパネルシアターがあることに驚いていた。

各グループでだんだんリーダーができてきて、実演の際には、読む人、動かす人、動かす人どうしの分担など自然にできてきた。日頃のサークルなどでの人間関係が現れ出ているように感じた。教員の私は、簡単にできる「カレーライス」の進行状況を知らせ、「あせらせる」こと、「カレーライス」「はらぺこあおむし」で声を出して歌い始めさせ、「はずかしさ」を「解除」するように気をつけた。2クラスでのちがいは、つくるのに時間がかかった方があつという間に上演できたのに比べ、すぐつくれた方が、上演についてはリーダーどうしが「お見合い」で引っ張れず、何をしたいかわからない学生が出ていたことだ。「かずってなあに」は、一番時間がかかった。2グループで上演を分担したうえ、最後まで上演しなかった。

つくるところからはじめるのは、何よりも時間をかけずつくってしまう点よかった。「かずってなあに」「あかちゃんがうまれた」はやはり複雑で、これを学校で教師が一人で準備するとなると、多忙な現場では「おっくう」になるだろう。切り取るぐらいから、子どもたちといっしょにやってもいい、というか、上演を見る「お客様」でなく、つくるところからいっしょに子どもたちとやることにむしろ教育的意味があると感じた。それは教師にとっても「楽」にとりくめることになるだろう。

「教育方法論」として学んでほしかった点と、学生の反応などから気づいた点について以下述べる。

小学校(以上)の学ぶ内容があるパネルシアターの存在に驚いていた。「あかちゃんがうまれた」では、照れたり冷やかし半分だったりしたが、結構感動していた。

子どもの反応を取り入れていく点について、「カレーライス」に「トマト」があったが、学生自身の「トマト入れるかな」の声をひろって、子どもたちの家で入れそうなものを追加でつくっておくと、面白いし、カレーライスの作り方もそれぞれの子もたちで「言いたいこと」がでてくるだろうことを確

認した。それで教材を子どもに合わせて変えていくのである。そういう保育教育を期待した。

「教育方法論」の一つのテーマは、「教材・題材の発展性」であった。これが次の何につながるかを、学生に声かけをした。小学校教員志望者には、保育教材を子どもっぽいと馬鹿にする傾向が感じられたが、それぞれ小学校でどう発展させるか考えるように声かけをした。「カレーライス」なら、遠足で実際にカレーを作ることの導入にする、とかである。パネルシアターは、本物・現実に挑む際のオリエンテーションにつかえる。ひとつながりの出発点もしくは結節点に置けそうである。

別の発展性として、発達を、全身の動き、手指の操作、頭の中(言語・表象)の3つのレベルで見えることをやっていた。「かずってなあに」については、基本的に手指の操作なのであるが、何回か前の授業で、体育館で全身を使って 分類 などの動きを経験した。その時、10 進法についても、10 人が揃ったら列になって、卓球板で仕切られたとなりのエリアに移動することをやっていた。この意味が、「かずってなあに」で分かったと思われる。特に小学校の教師にとっては、頭の中を支える手指の操作、全身の動きを意識した教育を、保育者にとっては、全身の動き、手指の操作がその時は楽しく遊んでいるだけに見えるが、いずれ「学力」(頭の中)を支えていくことをしているんだという自覚(と自信)を持ってほしかった。これらを通して、「1 の位の世界には9までしか入れないんだ！」などと 10 進法のしくみにあらためて気づいた学生がいた。「はらぺこあおむし」では、これを全身の動きにすると、いろいろな果物を大きな張りぼてで作ってその中をくぐっていくようなことになる。一つの題材を学ぶとき、全身の動き、手指の操作、頭の中(言語・表象)の3つのレベルを考えると、3倍構想がふくらむのである。

このような目を今年1年生のときから持ってもらいたくて前期「子ども学総論」で取り組む予定である。大学での教育でも、いろいろなことが考えられる典型的な教材として、パネルシアターは有用だと思われる。

(2)お茶の水女子大学 富士原紀恵

○実施内容

2013年11月20日15時30分～17時30分：文京区本郷児童館における学生企画イベント(おちゃっこ DAY)での「パネルシアターで遊ぼう」 学生参加者8名、児童参加者16名

2013年11月23日14時～15時：文京区立千駄木小学校の休日「子ども教室」におけるお茶大の学生企画イベント「パネルシアターを楽しもう」 学生参加者2名、児童参加者8名

2014年9月30日(時間帯、1と同)：文京

区本郷児童館の1と同イベント 学生参加者8名、児童参加者：16名

○趣旨と目的：

児童館ボランティアや学校ボランティアをやっている学生にパネルシアター経験を尋ねたところ、全員が自分の幼稚園や保育園時代に見ていた。ただし、実際に自分たちでもパネルに貼り付けて先生のようにやってみたかったものの、やらせてはもらえず、触らせてもらった程度だったという感想が多かった。一般的にパネルシアターでは演者(教師や保育者)と観客(子ども)が明確に分離しており、演者には観客を引き込む高い表現力が求められている。一方で、学生の経験談によれば、観客とされている子ども自身も、観客としての参加のみではなく、実際に自分たちで演じてみたいという意欲を持っていると推測された。そこで、子ども自身によるパネルシアターを通しての表現活動を実現したいと考え、子どもを演者としたパネルシアターを企画した。その際、既製品のパネルシアターを使って演じさせるのではなく、パネルシアターの構想-制作-演技の一連の表現活動の流れすべてを子どもに経験させたいと考えた。ただし、いずれも施設の都合で時間は限られており、時間内に全てを子どもが主体となっていくには限界があることから、構想段階についてはテーマ(例えば、時期的に運動会前であれば運動会に関する内容)は学生が決め、制作段階についても無地の絵人形を学生が事前に多数用意し、その中から16人を4人ずつに分けた子どもグループに自分たちで考えたストーリーを展開する上で必要な物を選択し、色づけをしてもらう、という作業に限定してみた。

いずれの活動でも、導入として、学生自身が既製品を使って子どもの動機付けを行った。

の時には学生の用意した絵人形があまりに豊富過ぎて、子どもが選びきれない、また子どものグループ分けは子どもに任せため、学生が指導についても人間関係が絡んでうまくグループ活動が展開できず、時間内に終わらないグループもあった。特に、ストーリー作成で学生がどこまで介入すべきか迷い、実演までこぎ着けないグループもあった。

そこで、 の反省を踏まえ、 の時には、ある程度絵人形の数に限定し、学校での子ども関係を把握したグループを作り、ストーリー作りによって学生が積極的に関与する形で実施してみたところ、時間内で作品を作り上げ、演じることができた(なお、1グループずつ発表させ、その間は他のグループは観客となる)。子どもの感想などは収集していないが、 も でも、どの子どもも一生懸命無我夢中で取り組んでいたには違いない(活動に飽きていた子どもは一人もいなかった)。作品としてのできばえよりも、自分たちで作って演じてみることで自分自身におもしろさを感じているようであった。

では既製品のパネルシアターを使い、ただし、ストーリー展開は教えず、子ども自身に絵人形だけ与えてストーリーや演じ方を考えさせるという形で進めた。同じ絵人形を使っても、ストーリー展開や演じ方により個性的なパネルシアターになった。

～ 全てにおいて、誰かが演じている際には、残りの子どもは観客になる。その際も、誰も全く予想もしない展開になったり、あるいは子どもたちは共有している日常での出来事を盛り込んだりすることで、観客である子どもも一体になって盛り上がっていたのが印象的だった。演者が観客を引きつけるという意味での観客の手応え、反応を見るという意味の応答性というよりも、演者と観客がともに創って行くというプロセスが展開されていたといえる。つまり、子どもの自由な創作表現活動(「鑑賞」という経験も含め)として、パネルシアターが機能することが確認できた。

○反省点と今後の課題

活動の日程や時間制限があったため仕方ないが、いずれも時間不足であった。もっと時間が与えられれば、子どもなりにある程度の水準の物が制作できたと思われた。数回にわたって継続的に展開できれば、さらに充実した作品になったと思われる。また、制作したパネルシアターの内容について、子ども自身は非常に楽しんでしたが、児童館の職員からすると、ストーリー展開や表現に道徳的に問題があるといった指摘も受けた。そこで積極的に指導をしないのかという意見ももらった。学校では無い場所で、指導者として大学生が関わるからこそ、自由な表現が許されると子どもは状況を受け止めて喜んで表現し、活動していると理解している。

しかし、内輪の子どもにとっては楽しいことでも、第三者が見て不快に感じる表現を許していいのかどうかというのは問題であるとも言え、今後、子どもが表現活動を展開する上で、第三者の期待に応えられる作品を制作するために、どこまで大人が介入することが許されるのか、という点は考えてゆく必要がある。既製品のように完璧な作品である必要は全くないし、それを求めてはいない。ただし、創作・制作が誰に向けてなされるのか、という相手意識をもう少し明確にすることで、解決できるのでは無いかと考えている。今年度も児童館活動として学生が続けて行く予定であり、一つ一つ課題をクリアして、子ども主体の尾パネルシアターの制作の可能性の豊かさを掘り下げて行きたい。

(3)大東文化大学 渡辺恵津子

2012 年度教員研修等のあゆみ

9.13-15 石巻市立雄勝小学校で教員向けにパネルシアターを実演する

1.26-27 宮城県教職員組合GO!DO!教研 in 仙台

3.27-28 福島県会津の大熊町を視察訪問

2013 年度教員研修等のあゆみ

4.6 宮城県教職員組合迫支部、登米市の教員が多く参加

6.9 福島県学童保育研究集会全体講演と分科会講義

6.21-22 宮城県教職員組合石巻支部青年部、石巻市・気仙沼市・南三陸町の教員が参加

8.2-3 宮城県教職員組合中央支部女性部、東松島市の教員が参加

8.20 大東文化大学教員免許更新講座でパネルシアター実演

8.22 船橋市教職員組合教育研究集会で実演

8.23 志木市教職員組合で実演

8.24 松戸市教職員組合サマースクールで実演

9.24 松戸市立高木小学校研修会で実演

11.6 宮城県石巻市立雄勝小学校に預託

11.17 宮城県教職員組合黒川地区研究会で「セシウム君」「さんすう」「いのちのたんじょう」を実演し、検討会を行う。

11.22 東京都教職員組合大田区教育研究会で実演

2.22 桃井第二小学校で若い教師、学生に実演

2014 年度教員研修等のあゆみ

4.5-6 宮城教育センター主催春の教育講座で実演

5.13 デンマーク K0ge コミュニティにある国民学校 Skovboskolen に算数パネルシアター預託。

5.23 板橋家庭教育学級で2～4歳児対象の親子に幼児向けのパネルシアター、親向けに「算数パネルシアター」を実演

6.14 長野県立科町立立科小学校校内研究会にて2年生に算数パネルシアターを実演

5.31 愛媛県民主教育研究所主催教育講座で実演

7.5 宮城県教職員組合主催「パネルシアターをつくろう」学習会で参加者とともに「わり算」「かけ算」他のプランを作成、参加者15名

7.26～27 宮城県教職員組合主催教育研究集会でパネルシアターの制作、参加者40名で「わり算」「かけ算」「三ケタの数と計算」「ひき算」等を自作

7.28～29 高知県作文の会でパネルシアターの実演、参加者63名

8.25 埼玉県和光市立新倉小学校校内研究会で実演

8.29 私立啓明学園小学校校内研究会で実演

9.19 習志野市教育研究集会で実演

10.5 日高市教職員組合研究会で実演

(4)インドネシア・バンダアチェ訪問記

日本社会事業大学 田村真広

略

(5)『きみは見えないセシウムくん』制作過

程から学ぶ
神奈川工科大学 田辺基子
略

(6)「学びの質」を問う
北陸学院大学 辻直人
略

(7)へき地指定校における地域教材等の活用
について
愛知教育大学 中妻雅彦
略

(8)ひとままとまりの協同活動としての総合学
習 - 3.11 後のシステム社会と生活世界
横浜国立大学 金馬国晴
略

5. 主な発表論文等

〔図書〕(計5件)

原案・渡辺恵津子、作・日本生活教育連盟
パネルシアター実践研究会、埼玉福祉会、さ
んすうたんけん教室；かずってなゝに、2015、
14

原案・新津あゆみ、作・日本生活教育連盟
パネルシアター実践研究会、埼玉福祉会、ウ
オータンの探検、2014、16

原案・林友子、作・日本生活教育連盟パ
ネルシアター実践研究会、埼玉福祉会、ダスト
ンの探検、2014、18

原案・渡辺恵津子、作・日本生活教育連盟
パネルシアター実践研究会、埼玉福祉会、さ
んすうたんけん教室；3けたの数の計算、
2015、14

原案・田辺基子、作・日本生活教育連盟パ
ネルシアター実践研究会、埼玉福祉会、きみ
は見えないセシウムくん；理科・総合篇、2015、
18

6. 研究組織

(1)研究代表者

田村 真広 (TAMURA, Masahiro)
日本社会事業大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：90271725

(2)研究分担者

渡辺 恵津子 (WATANABE, Etsuko)
大東文化大学・文学部・准教授
研究者番号：80649442

田辺 基子 (TANABE, Motoko)
神奈川工科大学・基礎・教養教育センタ
ー・准教授
研究者番号：10460255

中妻 雅彦 (NAKATSUMA, Masahiko)
愛知教育大学・教職大学院・教授
研究者番号：50523370

加藤 聡一 (KATOH, Soichi)
名古屋芸術大学・人間発達学部・准教授
研究者番号：90293852

富士原 紀絵 (FUJIWARA, Kie)
お茶の水女子大学・文教育学部・准教授
研究者番号：10323130

金馬 国晴 (KINMA, Kuniharu)
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：90367277

辻 直人 (TSUJI, Naoto)
北陸学院大学・人間総合学部・准教授
研究者番号：70523679